



シカ

捕獲

の手引き

改訂版

東北森林管理局

平成31年3月

はじめに

本手引き書は、東北森林管理局が平成 28 年度、平成 29 年度に実施した「森林鳥獣被害対策技術高度化実証事業」、平成 30 年度に実施した「シカによる森林被害緊急対策事業」の成果を基に、森林管理に携わる方を対象としてわなを用いた効果的なシカの捕獲方法を解説することを目的としています。

シカを効果的に捕獲するためには、適切な手順によって捕獲作業を実施することはもちろん、それ以前に適切な場所、適切な捕獲手法を選択して実施することが重要です。そのため、本手引き書では、まず第 1 章で捕獲の実施地域を選ぶ方法を解説しています。次に第 2 章で事前調査を実施して地域のシカの生息状況等を把握する方法を、第 3 章では事前調査の結果から捕獲手法を選ぶ方法を解説しています。そして、第 4 章では実際の捕獲作業の手順として、実証事業等で捕獲成果が得られた「移動式囲いわな」、「小型囲いわな」と「足くりわな」を用いた捕獲方法について解説しています。

本手引き書を現場での実際の捕獲実施に活用して頂ければ幸いです。

【本手引き書の構成】

第 1 章 捕獲の実施地域を選ぶ

2



第 2 章 事前調査でシカの生息状況を把握する

4



第 3 章 捕獲手法を選ぶ

7

(1) 各捕獲手法の概要

(2) 各捕獲手法の特徴と選択のポイント



第 4 章 捕獲作業の実施手順

10

(1) 移動式囲いわなを用いた捕獲の実施手順

(2) 小型囲いわな

(3) 足くくりわなを用いた捕獲の実施手順

第 1 章 捕獲の実施地域を選ぶ

森林においてシカの捕獲を実施する一番の目的は、シカによる森林被害への対策です。その目的を達成するためには、シカによる森林被害が顕著に発生している地域を捕獲の実施地域として選定する必要があります。また、一定の捕獲成果が求められる場合には、シカの生息密度がある程度高い地域を選定する必要があります。この章では事前の情報収集により、捕獲の実施地域（＝シカの生息密度が高い地域）を選ぶ方法について解説します。

想定する選定対象のスケール：国有林単位

捕獲実施地域の選定にあたり、まずは既存の情報を活用して、広域での森林被害の発生状況やシカの生息状況を把握し、国有林単位で捕獲の実施地域を選定しましょう。実証事業では、以下の様な情報を活用して実施地域を選択しました。

■ シカによる森林被害に関する情報

過去に対象地域内でシカによる被害調査が実施されている場合には、その成果を活用しましょう。ただし、被害の発生状況はシカの生息状況を反映して変化するため、新しい情報を収集する必要があります。

また、東北森林管理局管内では、平成 26 年度から簡易チェックシートを用いた二ホンジカ影響調査を実施しています。この成果についても活用が可能です。

■ シカの生息密度に関する情報

シカの生息密度について直接的に調査を実施していない場合でも、各都道府県が策定する特定鳥獣管理計画に生息密度に関する記載がある場合があります。確認してみましょう。

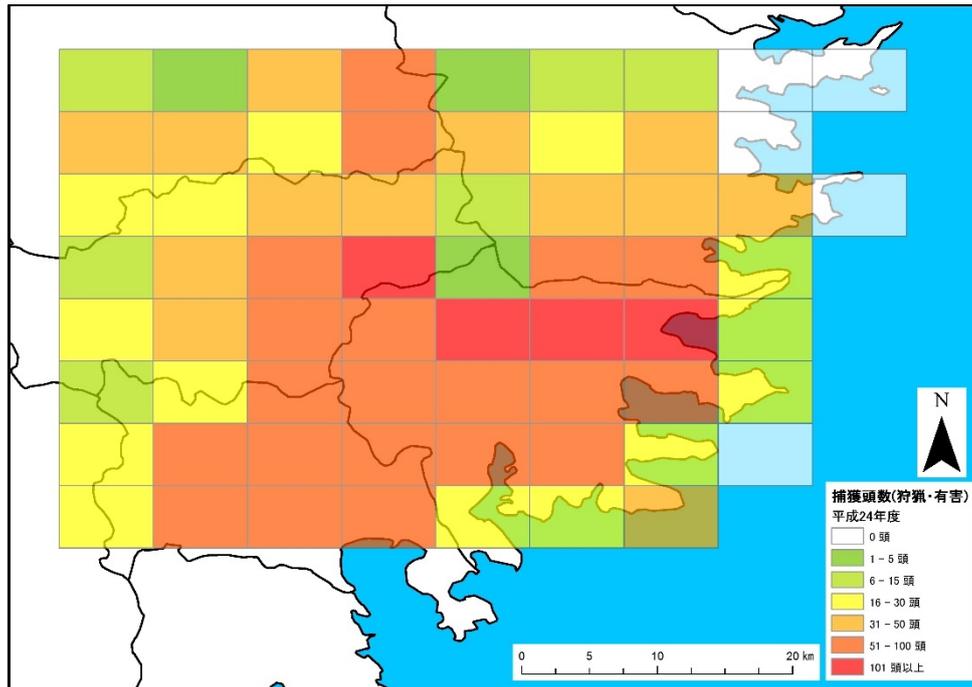
■ 捕獲頭数に関する情報

捕獲頭数はシカの生息密度をそのまま示しているとは限りませんが、直近の情報が得られやすいため大変有用です。また、5 km メッシュで集計されているため、比較的小さなスケールでシカの生息状況を把握することが可能です。基本的に各都道府県でデータを集約している場合が多いですが、有害鳥獣捕獲による捕獲頭数については各市町村でもデータを所有しています。

また、捕獲頭数に関する情報は地域での捕獲実施状況の把握にも役立ちます。近年は、鳥獣被害問題への意識の高まりから、狩猟による捕獲以外にも各地域で様々な捕獲事業が実施されています。新たに捕獲を実施する場合には、地元狩猟者による捕獲活動や各機関が実施する捕獲事業との“棲み分け”についても留意する必要があります。

■ 関係機関へのヒアリングにより得られる情報

対象地域のシカの生息状況や森林被害の発生状況について、地元の猟友会や行政機関、森林管理の作業者等を対象としてヒアリングを行います。また、狩猟や捕獲事業の実施状況やシカ以外の動物の生息状況についても聞き取りを行いましょう。



捕獲頭数の集計例

■ アクセスに関する情報

わな資材や捕獲個体の運搬を考慮すると、捕獲実施場所は道路や林道からのアクセスが良い場所であることが望ましいため、林道等の通行規制や除雪状況等の情報収集も必要です。特に冬季の捕獲の場合にはこれらの情報の把握は重要です。前記の関係機関へのヒアリングの際にあわせて確認するとよいでしょう。

第2章 事前調査でシカの生息状況を把握する

国有林単位で実施地域がおおよそ選定できたら、事前調査の実施により対象地域におけるシカの生息状況や森林被害の発生状況などを把握しましょう。調査の結果は、捕獲実施時期や捕獲手法の検討、わなの設置場所の選定などに活用が可能です。

なお、東北森林管理局では、シカにGPS首輪を装着しての追跡調査を実施しており、これまで岩手県の早池峰山周辺や笛吹峠周辺などの多雪地域においては、長距離の季節移動も確認されています。また、長距離の季節移動以外にも、積雪や食物資源の量などの季節的な環境の変化によってシカの生息状況は変化します。よって、シカを効率的に

捕獲するためには、捕獲実施予定の1年前の同じ季節に事前調査を実施することが望ましいといえます。

実証事業では、事前調査として以下の様な調査を実施しました。

■ ライトセンサス調査

夜間に林道などを車で走行しながら、強力なスポットライトを用いてシカを捜し、直接観察によりシカの出没状況を把握します。よく出没している場所を把握することで、わな設置場所の選定に活用できます。また、同じルートを定期的に調査することで、生息状況の季節的な変化が把握でき、捕獲実施時期の検討にも活用できます。比較的広範囲でのシカの生息状況が把握できます。

なお、シカの出没状況は時間帯によって異なるため、異なる時間帯に複数回実施することも検討するとよいでしょう。



-
- この調査で把握できること
 - ✓ どの林道沿いでシカの出没が多いか、どこによく出没しているか
 - ✓ 集団での出没が多いか、単独での出没が多いか
 - ✓ 出没個体はオスが多いか、メスが多いか
 - ✓ 集団のサイズ（頭数）はどれくらいか
 - ✓ どの季節にシカの出没が多いか

■ 現地調査

現地でシカの痕跡（食痕、糞、獣道など）や周辺環境（地形や植生）を確認します。樹皮剥ぎが多く確認できる場所では、冬季にシカの生息密度が高いことが予測できるなど、冬季の利用状況についてもある程度把握が可能です。



- この調査で把握できること
- ✓ どの林道沿いでシカの痕跡が多いか、どこにシカの痕跡が多いか
- ✓ どこで森林被害が発生しているか
- ✓ 林道沿いの地形は平坦か、急峻か

■ カメラトラップ調査

自動撮影カメラを設置して、シカの生息状況を把握します。長期間調査を継続することで、生息状況の季節的な変化が把握でき、捕獲実施時期の検討にも活用できます。また、併せて餌を設置することで、餌の誘引効果や餌の種類による嗜好性についても確認できます。比較的狭い範囲（スポット）でのシカの生息状況が把握できます。



- この調査で把握できること
- ✓ どこによく出没しているか
- ✓ 集団での出没が多いか、単独での出没が多いか
- ✓ 出没個体はオスが多いか、メスが多いか
- ✓ 1グループのサイズ（頭数）はどれくらいか
- ✓ どの季節にシカの出没が多いか
- ✓ シカ以外の動物（ツキノワグマ、カモシカなど）の出没状況

第3章 捕獲手法を選ぶ

効果的な捕獲手法は、地域のシカの生息状況、捕獲の実施時期、地形など様々な条件で異なります。各捕獲手法の特徴を十分理解し、事前調査の結果から適した捕獲手法を選択することが重要となります。この章では、実証事業等で使用し、実際に捕獲できた3種類のわなの概要と特徴について解説します。

(1) 各捕獲手法の概要

■ 移動式囲いわな

- 餌を用いてわな内に誘引し、扉を落として捕獲する
- 複数頭の捕獲が可能
- 大きな労力をかけずに移設ができるよう、わなの資材や設置方法が工夫されており、サイズも周囲長 20m 程度のものが多い



■ 小型囲いわな

- 餌を用いてわな内に誘引し、扉を落として捕獲する
- 小型軽量
- 四国森林管理局 森林技術・支援センターが開発



http://www.rinya.maff.go.jp/shikoku/gijutu_c/kanryokadai/170412_2.html

■ 足くくりわな

- 獣道などシカの通り道に設置し、シカがわなを踏むとワイヤーで足がくられる



(2) 各捕獲手法の特徴と選択のポイント

各捕獲手法の特徴と選択のポイントを下の表にまとめました。それぞれわなにはメリット、デメリットがあります。例えば、移動式囲いわなでは一度のわなの作動で複数頭を同時に捕獲することができますが、わな1基にかかる購入費が高く、設置にかかる労力が比較的大きいという特徴があります。一方で、足くりわなでは、一度のわなの作動で捕獲できるのは1頭のみですが、わな1基にかかる購入費は安く、設置にかかる労力が比較的小さいという特徴があります。

また、移動式囲いわなでは、餌で誘引して捕獲しますが、わなが“目に見える”のでシカが警戒する場合があります。シカを捕獲するには、餌の誘引効果がわなへの警戒を上回る必要があり、餌の誘引効果の強さは周辺の食物資源の量に影響を受けます。シカの生息密度が高い地域では食物資源が少なくなり、餌の誘引効果が高くなることが考えられます。また、同じ地域でも秋季と比べて冬季は食物資源が少ないため、餌の誘引効果は高くなります。

小型囲いわなは、移動式囲いわなと足くりワナの中間的な特徴をもっています。

	移動式囲いわな	小型囲いわな	足くりわな
捕獲できる頭数	1～複数頭	1頭	
警戒のしやすさ	警戒しやすい	警戒しづらい	
購入費	高い	安い	
設置の労力	大	小	
見回りの労力*	小～中（誘引状況による）		大
捕獲難易度	低		高
錯誤捕獲の可能性	低		高
選択のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・餌の誘引効果が高い ・設置が可能な場所がある ・集団の出没が多い 		<ul style="list-style-type: none"> ・クマ・カモシカが少ない ・単独個体の出没が多い

* 見回りにかかる労力は、移動式囲いわなではゲートシステムの利用、小型囲いわなや足くりわなでは捕獲通知システムの利用によって軽減できる場合があります。詳細については第4章を参照して下さい。

第4章 捕獲作業の実手順

(1) 移動式囲いわなを用いた捕獲の実手順

① わなの設置場所を選ぶ

まず、事前調査の結果から、わなの設置候補地を選定します。このわなは、捕獲でシカの出没が減少したり、周辺個体の警戒が高まったりした場合に、わなを移設することで継続的な捕獲が望めるという特徴があります。そのため、わなの設置候補地は複数箇所選定しましょう。また、冬季に積雪がある地域では、積雪によりシカの出没が大きく減少する場合があります。環境が異なる複数の林班で設置候補地を選定しておくといいでしょう。

設置候補地を選定する際には次の点に注意します。

- ✓ わな資材や捕獲個体の運搬が可能な林道沿いであること
- ✓ わなの設置が可能な平坦な地形であること
- ✓ 周囲に新しいシカの痕跡が確認できること
- ※ 林内や林縁部など、人目に付きにくい場所の方がシカにわなを警戒されにくいと考えられます。
- ※ ゲートシステムを利用する場合には、ソーラーバッテリーから給電する必要があるため、周辺に日当たりが良い場所があることにも注意する必要があります。

設置候補地を選定したら、自動撮影カメラと誘引餌を設置して、シカの出没状況を確認しましょう。調査期間は捕獲実施地域のシカの生息密度や出没状況などから検討する必要がありますが、一般的には2週間程度を目安とすればよいでしょう。餌の嗜好性をまだ確認していない場合には、数種類の餌を設置してみて、地域のシカがどの餌を好むか実験してみましょう。



【コラム① 餌の種類について】

地域によって、シカの餌の好みには多少違いがあるようです。実証事業等では、これまで家畜用の飼料として市販されている、ヘイキューブ、チモシー(乾牧草)、アルファルファペレット、圧片大麦、ビートパルプ、ふすま、鉾塩を使用してきました。気仙沼市のシカはヘイキューブを、釜石市のシカはふすまを好む個体が多い様でした。他の地域では配合飼料なども使用されており、牧草に醤油をかけると効果があるといった論文*も発表されています。餌は入手がしやすく、扱い易いものを選ぶとともに、他の動物種を誘引しないものを選ぶことも重要です。

*池田 敬・児玉 大夢・松浦 友紀子・高橋 裕史・東谷 宗光・丸 智明・吉田 剛司・伊吾田 宏正.
二ホンシカの効率的な捕獲に向けた醤油の選択効果の検証. 2016. 哺乳類科学. 56(1): 47-52

② わなの設置

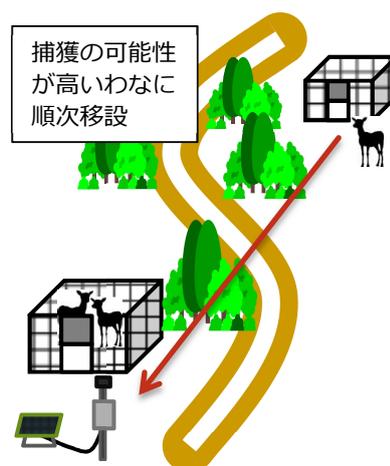
自動撮影カメラで撮影された映像から、連日シカが出没していることが確認できたら、わなを設置します。移動式囲いわなには、一度のわなの作動で複数頭を同時に捕獲できるというメリットがあります。そのため、集団が出没している設置候補地を選んでわなを設置することで、捕獲の効率化が望めます。

わなの設置直後はシカが警戒することがあるため、餌はわなの中だけではなく、外側にも散布します。わなの入り口から5~10m程度ライン状に散布すると良いでしょう。また、周辺のシカが餌を食べ馴れていない場合には、誘引がうまくいかないことがあります。その場合には、わなから半径 50~100m の範囲に数箇所の餌場を設けて、餌の味を覚えさせることでわな周辺への誘引が成功することもあるようです。

わなの作動方法には、従来の蹴り糸を用いる方法のほか、市販のゲートシステムを用いる方法があります。ゲートシステムは約 70 万円~と導入には費用がかかりますが、捕獲の確実性の向上や、見回りにかかる労力の軽減など捕獲の効率化に大きな効果があります。



なお、必ずしもわなの台数分のゲートシステムを導入する必要はありません。実証事業では2台のわなに対して1基のゲートシステムを使用し、捕獲の可能性が高いわなにゲートシステムを順次移設する方法を試行しました。ゲートシステムを設置していないわなでも、わなへのシカの馴化が進み、ゲートシステムを移設した晩に捕獲に成功するなど、短い間隔で捕獲を繰り返すことができました。



【コラム② ゲートシステムの種類と特徴について】

現在、市販されているゲートシステムには二つのタイプがあります。一つはwebカメラによってリアルタイムの映像を確認しながら、遠隔操作でわなを作動させるタイプ（Webカメラ方式）。もう一つは、ゲートセンサーがわな内部への進入頭数をカウントして、事前に設定した捕獲頭数に侵入頭数が達したら自動で扉を落とすタイプ（頭数カウント方式）です。下の表にまとめたようにそれぞれ特徴が異なるため、捕獲の実施体制や捕獲現場の環境に適した製品を選択する必要があります。

	Webカメラ方式	頭数カウント方式
通信システム	あり（携帯電話の3G回線を使用）	なし
電源供給	ソーラーバッテリー（消費電力大）	ソーラーバッテリー（消費電力小）
長所	<ul style="list-style-type: none"> 現場に行かなくても、出没状況や侵入状況の把握が可能 錯誤捕獲の危険性がほぼ無い 捕獲の確認（見回り）が必要ない 	<ul style="list-style-type: none"> 設置場所の制限が小さい 捕獲待機の労力がかからない 通信費がかからない
短所	<ul style="list-style-type: none"> 設置場所の制限が大きい（通信電波・日当たり） 捕獲待機の労力がかかる 別途、通信費がかかる 	<ul style="list-style-type: none"> 自動撮影カメラを設置して、出没状況や侵入状況の把握が必要 錯誤捕獲の危険性がある システムの稼働中は毎日の捕獲確認（見回り）が必要

③ 見回りとメンテナンスの実施

見回りはシカの出没状況に合わせて、出来るだけこまめに実施します。古くなった餌はシカがあまり食べないため、適宜交換・補充しましょう。餌の減り具合や自動撮影カメラの映像から、わなの近くの餌の採食が確認できたら、少しずつ外側に散布する餌の

量を減らしていきます。ただし、親子や集団で出没している場合、成獣よりも幼獣の方が警戒心が低く、わなの中に入りやすい傾向があります。幼獣は中まで入っていても、成獣が入っていない場合には、外側にも餌の散布を続ける必要があります。

なお、わなの設置後おおよそ2~3週間程度シカの出没が無い場合や、連日シカが出没しているにも関わらず、わなの中に入らない場合には、周囲のシカがわなを警戒しているか、餌の誘引効果が低い可能性が考えられます。他の設置候補地への移設を検討しましょう。

④ わなのセット

出没している多くの個体の中まで入っていることが確認できたら、いよいよわなをセットします。セット後にはわなが正常に作動するか、必ず確認しましょう。餌はわなの中だけに散布します。

【コラム③ わなの中に入らない個体はどうするか？】

集団が出没している場合、ほとんどの個体がわなの中まで入っているにも関わらず、どうしても中まで入らない個体がいる場合があります。そういった個体はいずれ中まで入るようになるかもしれませんが、いつまで経っても入らないかもしれません。スレ個体（わなの危険性を学習した個体）を増やさないためには、できるだけ出没個体を捕り逃さないことが必要ですが、いつまでも捕獲せずに餌付けを続けることも問題です。また、連日出没していた集団が突然出没しなくなることもあります。難しい判断にはなりますが、“捕獲できる個体を捕る”という決断が必要となる場合もあります。

⑤ 捕獲個体の止めさし方法

無事に捕獲が完了したら、止めさしを行います。止めさしには、銃器を用いる方法や刃物を用いる方法などいくつか種類があります。実証事業では、捕獲個体をポケットネットに追い込んで保定したうえで、簡易電殺機を用いた止めさしを実施しました。



↑ 簡易電殺機



ポケットネット→

止めさしの実施手順は以下の通りです。

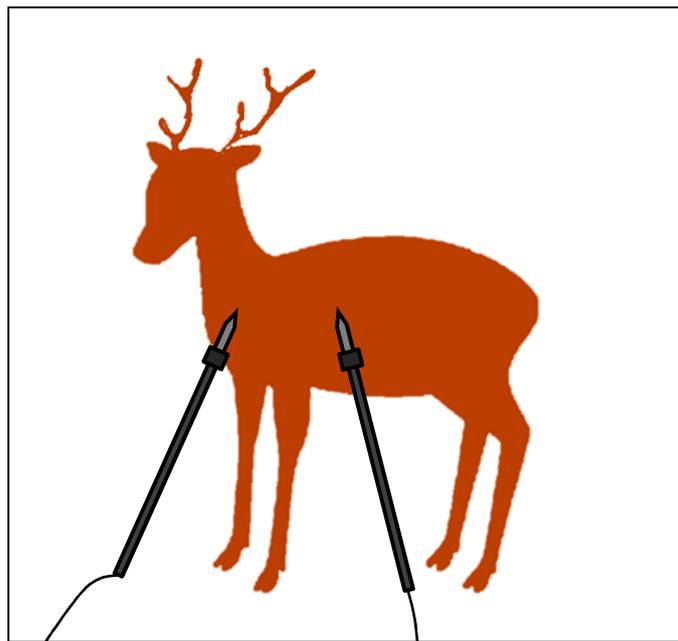
1. 移動式囲いわなの周囲をブルーシートで覆い、搬出口にカラビナ等でポケットネットを装着する。
2. 搬出口を開放し、ポケットネットに捕獲個体を追い込む。
3. 捕獲個体がポケットネットに入ったら、ポケットネットの中央部に設置したロープを両側から引いて、ネットを絞って保定する（捕獲個体のサイズにより、ロープの位置をネットの奥側にずらすと保定しやすくなる）。
4. 簡易電殺機の電源を ON にし、2本の電極の先を捕獲個体の心臓を挟む形であてる。失神が確認されても、完全に動きが止まるまであて続ける。

※複数頭を同時に捕獲した場合は 2～4 を繰り返して、1 頭ずつ止めさしを実施します。



注 意

- ✓ 感電事故を防止するため、止めさし実施者は必ずゴム製の長靴や厚手の手袋を装着します。
- ✓ 実施者以外は不用意に近づかないなど作業従事者の安全には十分注意して実施します。



電極のあて方

(2) 小型囲いわなを用いた捕獲の実施手順

わなの設置手順等については、移動式囲いわなとほぼ同様なので、異なる点についてのみ記述します。

小型囲いわなは小さいのが特徴で、設置や移設、設置場所の選定が容易である、保定せずに簡易電殺器での止めさしが可能である、導入にかかるコストが小さい、セットのタイミングに悩むことがない等の長所があります。

一方、基本的に1頭しか捕獲できないため、群れに対しては確実に捕り逃しがあり、捕り逃し個体の警戒心が高まる可能性がある、捕獲個体が上部から脱走することがある等の短所があります。

捕り逃して警戒心が高まる個体について足くくりわなでの捕獲を試みる等、計画時に対応策を検討しておく必要があります。

また、わな上部からの脱走については上部に番線や金網を張る等の対応策が有効ですが、上面の 50%以上が塞がれたものは箱わなの扱いとなるため、捕獲許可申請の際に注意が必要です。

【コラム④ シカの大きさ】

本州に生息するホンシュウジカ *Cervus nippon centralis* の成獣の体重はオスで 75～90kg、メスで 40～60kg とされていますが、九州と四国に生息するキュウシュウジカ *Cervus nippon nippon* の体重は 30～50kg と一回り小さいとされています。

小型囲いわなは四国森林管理局で開発され成果をあげていますが、東北地方では特に大型のオスの上部からの脱走が相次いでおり、この体格の違いが原因と考えられます。緊急対策事業では番線をクロス状に張って対応しましたが 29 頭の捕獲個体のうち 1 頭が脱走しています。

（3）足くくりわなを用いた捕獲の実施手順

① わなの設置場所を選ぶ

まず、現地調査を実施し、林道沿いでシカの新しい足跡が確認できる獣道を探します。急傾斜に付いている獣道では、シカが足を付く場所が定まりにくく、雨でわなが露出しやすいので避けた方が良いです。獣道を辿り、傾斜が緩やかな場所を探しましょう。



獣道が決まったら設置場所を選びます。獣道の幅が広い場所では足を付く場所が定まりにくいため、幅が狭くなっている場所を探します。また、わなのワイヤーを固定する根付の木がワイヤーの届く範囲にあることも重要です。根付の木は捕獲個体が暴れても折れないよう、丈夫な生木を選びましょう。

② わなを設置する

市販の足くりわなには様々な種類があり、設置方法にも多少違いがあります。実証事業では、踏み上げ式の足くりわなを使用しました。設置の手順は以下の通りです。

1. 穴を掘る

わなのサイズに合わせて、シャベルや手鋤等で穴を掘ります。掘った土はわなの埋め戻しに使うので、一箇所にまとめておきましょう。根が張っている場合には剪定バサミ等で処理します。

2. わなを置く

掘った穴の中にわなを置きます。わなが安定しない場合には、石や根などの障害物を除去して土を平らに均します。また、わなの下にベニヤ板を敷くと安定しやすくなります。

3. 根付の木にワイヤーを固定する

根付の木にワイヤーを結び付けます。シャックルはしっかりと締めましょう。

4. わなを埋め戻す

わなを土で埋め戻します。周囲の地面と段差ができないように土の量を調整しましょう。バネやワイヤーも落葉等で隠します。

5. 獣道を復元する

設置場所周辺の状態に合わせて獣道を復元します。落葉でカモフラージュするなど、違和感が出ないように工夫しましょう。ただし、わなの上に厚く落葉を被せたり、石や枝を置くと、わなが正常に作動しない場合があるので、注意が必要です。





【コラム⑤ 餌で誘引して捕獲する】

足くくりわなを用いた捕獲でも、餌でシカを誘引して捕獲することができます。実証事業では、餌場周辺での捕獲を試行しました。シカがうまく餌付けば連日餌場に出没するようになるため、わなを踏む確率が高まることが期待できます。また、餌場周辺で利用している獣道が明確となり、足跡からシカが踏みやすい場所を絞り込みやすく、わなの設置場所の選定が容易になるという効果も得られました。さらに、餌場にセンサーカメラを設置して、出没している動物種を確認することで、錯誤捕獲のリスクを下げることも可能だと考えられます。

【コラム⑥ 小林式捕獲法】

近年、近畿中国森林管理局和歌山森林管理署が開発した「小林式捕獲法」の足くくりわなの設置方法は、わなの周りにドーナツ状に餌を設置するもので、事前の餌付けが不要、設置時間短縮、シカに警戒されにくい、高度な設置技術を要しない等の特徴が紹介されています。緊急対策事業で岩手県釜石市において試行したところ、99 わな日で6頭捕獲でき（捕獲効率 0.061）、東北地方でも有効であることが確認されました。



餌には誘引されているが困いわなには警戒して入らない個体への対応策として有効であると考えられます。

http://www.rinya.maff.go.jp/kinki/wakayama/public-auction/h300502_kobayasisikihokaku.html

③ 見回りとメンテナンス

わなの設置後は毎日見回りを実施します。見回り時には、捕獲の確認はもちろん、空はじきしていないか、わなが露出していないか、作動を邪魔する落葉や落枝がわなの上に被さっていないかを確認し、必要に応じてメンテナンスを行います。また、周辺のシカの足跡を確認しながら、わなの位置を微調整することで捕獲に繋がる場合もあります。

わな設置後、2週間程度を目安に周辺でも足跡が全く確認できない場合には、わなの移設を検討した方が良いでしょう。

【コラム⑥ 捕獲通知システムの利用と注意点】

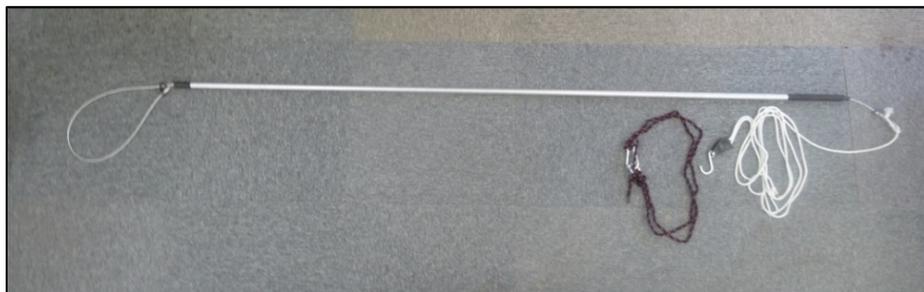
足くりわなは、基本的に毎日の見回りが必要となりますが、市販されている捕獲通知システムを用いることで、現場まで行かなくてもわなの作動を確認することが可能です。実証事業では、実際に捕獲通知システムを導入して、その有効性について検証を行いました。

結果として、捕獲通知システムを使用することで、見回りにかかる労力を軽減することは可能ですが、足くりわなは日常的なメンテナンスが必要となるため、システムに頼り切ると肝心の捕獲頭数が減少してしまう可能性が考えられました。

メンテナンスの必要頻度は、設置場所の環境や、シカやその他の動物種の生息密度など様々な条件で変化することが予想されます。そのため、捕獲通知システムありきで捕獲作業を始めるのではなく、まずは、毎日見回りを実施して現場の状況を見ながら、システムの導入について検討した方が良いと考えられます。

④ 捕獲個体の止めさし方法

シカが捕獲できたら止めさしを行います。止めさしには、銃器を用いる方法や刃物を用いる方法などいくつか種類があります。実証事業では、捕獲個体を保定具*を用いて保定したうえで、簡易電殺機を用いた止めさしを実施しました。



使用した保定具*

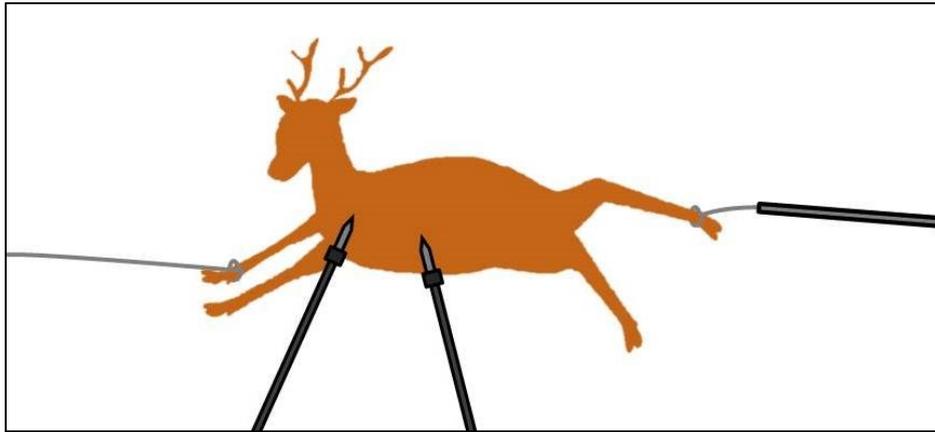
実施手順は以下の通りです。

1. 保定具のくくり輪を捕獲個体の肢にかける。暴れて、肢にかけることが困難である場合は角や首でも可。
2. 保定具のロープを立木に固定し、ロープを引いて保定する（保定具にロープラケットが付属しているため、ロープが引き戻されない）。
3. 簡易電殺機のスイッチを ON にし、2本の電極の先を捕獲個体の心臓を挟む形であてる。失神が確認されても、完全に動きが止まるまであて続ける。



*保定具の製作や使用方法については、以下の資料を参考にしました。

静岡県農林技術研究所 森林・林業研究センター、2016、『シカ捕獲ハンドブック くくりわな編』



保定具を用いた止めさし方法

注意

- ✓ 感電事故を防止するため、止めさし実施者は必ずゴム製の長靴や厚手の手袋を装着します。
- ✓ 実施者以外は不用意に近づかないなど作業従事者の安全には十分注意して実施します。

シカ捕獲の手引き

東 北 森 林 管 理 局

発行年月日　：　2019年3月18日

製 作　　：　合同会社 東北野生動物保護管理センター